



上田 俊英
(編集委員)

「秋晴れ」とは、こんな空を指すのだろう。10月16日。岩手県・三陸沿岸の野田村は、抜けるような青に包まれていた。村の中心部に、真っ赤な大鳥居が立つ。「愛宕神社」。14世紀の創建と伝えられるこの神社の参道は毎月16日、山海の幸などの出店が並び、大勢の村人が集う。恒例の「十六日市」である。

しかし、この日はもうひとつ、集う理由があった。東日本大震災の被災地をつなぐ「巡礼の道」。その巡礼地を示す標柱の除幕式が、十六日市にあわせて行われた。

「東北お遍路」。巡礼の道は、こう名付けられている。被災地の有志らが、震災の犠牲者の魂を鎮め、それぞれの地にまつわる震災の記憶を千年先まで語り継ぐこと、震災半年後に「道づくり」を始めた。

活動を立ち上げた新妻香織さん(56)は福島県相馬市に暮らし、アフリカ・エチオピアの環境保全などに取り組んでいた。しかし、震災が人生を変える。相馬市では関連死などを含め480人余が命を落とし、実家は津波で跡形もなくなった。そして、東京電力福島第一原発が爆発する。

「多くの人に被災地に来てもらうには、どうしたらいいのか」。新妻さんは、そう考えるようになる。震災を風化させないためだけではない。「人が来れば、そこで食べたり、泊まったりする。被災地の生業の支えになる」と思ったからだ。

頭に浮かんだのが、四国八十八カ所の寺を回る「お遍路」だった。東北の被災地をつなぐ新たな「お遍路」をつくらうと、一般社団法人を設立。公募で寄せられた150ほどの候補地を「手弁当」で3年かけて回り、巡礼地を選んでいった。

青森、岩手、宮城、福島の4県の海沿いに連なる「東北お遍路」の巡礼地は現在、62カ所。そのひとつが、野田村の真っ赤な大鳥居と、その近くにある楓の古木だ。東日本大震災で、野田村は高さ18層の津

波に襲われ、37人が亡くなる。津波とともに村の中心部に押し寄せる大量のがれき。そのがれきの流れを押しとどめ、津波の勢いを弱めたのが、大鳥居だった。大鳥居は高さ13・4層。震災の10年前、村の新たなシンボルとして建てられた。海と正対するその「立ち姿」は、まさに津波から村を守っているように見える。楓はその大鳥居と、奥に立つ古い鳥居の間にある。1896年に三陸沿岸を襲った明治三陸津波は2万2千近くの死者・行方不明者を出し、野田村でも261人が亡くなった。そのとき、この楓につかまった村人たちが、命を取りとめたという。

「この村の人びとは大自然に育まれ、その恵みによって生かされてきた。津波も、そうした大自然の営みのひとつ。そのことを、千年先まで語り継いでいきたい」

巡礼地の標柱の除幕式で、小田祐土村長はそう言った。大自然がもたらす恵みと災害。それは決して別物ではない。

野田村から国道45号を南に向かうと、ほどなく普代村に入る。ここの「普代水門」が63カ所目の巡礼地に決まった。

水門は高さ15・5層。その脇に立つ石碑に、建設に尽力した元村長、和村幸得さん(故人)の言葉が刻まれている。「二度あったことは、三度あってはならない」

普代村では明治三陸津波で302人、1933年の昭和三陸津波で137人が亡くなった。和村さんは水門の必要性を国や県に訴え続け、84年、ついに完成させる。

東日本大震災の巨大津波は、この水門さえ越えた。しかし、津波の勢いはそれが、村内での死者はゼロ。1人が行方不明のままだが、「奇跡の村」と言われた。

水門の海側に広がる「普代浜園地」。震災前は海水浴場やキャンプ場、村営プール、サケの孵化場などがあつたが、津波で壊滅。新たな「園地」の建設が進む。

その一角に、淡いグレーの像が立っていた。3匹のサケが寄り添い、天を向いている。村政策推進室の中村克成係長に由来を尋ねたら、サケの「供養塔」で、85年に村が建立したものだという。

「村はサケでうるおっていますから」この地の人びともまた、大自然の恵みによって生かされている。サケの供養塔はそのことを、村人たちに語り継ぐ。

◆ザ・コラムは毎週木曜日に掲載します。